

大学生の東南アジア基礎知識定着度：
愛知大学国際コミュニケーション学部生
および名古屋大学文系学部生に対する調査から
Japanese University Students' Knowledge Level for Southeast Asia:
Analysis of Test Results of Students of Aichi University
and Nagoya University

加納 寛

Hiroshi KANO

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: kano@aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper shows the tendencies of the knowledge level for Southeast Asian geography and history of the average and the high level undergraduate students in Japan by analyzing the test results of the students of Aichi University and Nagoya University. The test results show their basic knowledge of Southeast Asia is limited, although Southeast Asia is very important for today's Japan. It leads us to the conclusion that we should (1) ensure students acquire basic Southeast Asian geography in compulsory education such as elementary and junior high schools, (2) enhance the charm of Southeast Asian history at senior high school education by ① drastic "selection and concentration" of the terms to remember and ② showing students the concrete episodes and images of those terms.

はじめに

2022年度には高等学校において実施が予定されている次期学習指導要領改訂に向け¹、高等学校地理歴史科における科目再編とその科目内容に関する議論が高まってきている。とくに1989年学習指導要領（1994年4月施行）以来、必修科目とされてきた「世界史」については、次期学習指導要領においては必修科目から外される可能性が高くなってきており²、教育内容の見直しに関する議論も盛んになっている。高等学校教育における東南アジア史の取扱についても議論が進んでおり、東南アジア学会では2007年か

ら高大連携をも担当する「教育・社会連携担当理事」が置かれ、研究大会においても高等学校での世界史教育の内容見直しと高大連携に関するパネルが盛んに開催されており³、実態掌握に向けての努力と教育内容の再検討が、様々な観点から不断に行われている。

しかし、実際に高校教育を経てきた大学生が、東南アジアの地理や歴史についてどの程度の認識を有しているかについては、これまで必ずしも明らかにされてはいない⁴。大学生の「学力」実態の掌握については、「ゆとり教育」との関連もあって、2000年頃からメディアも含めて盛んに論じられてきた。その代表例としては、戸瀬・西村[2001]などのような、大学生の数学に関する学力低下についての一連の調査報告が挙げられる。一方、地理歴史分野においてとくに話題となったのは、日本地理学会地理教育専門委員会の「イラクがわからない大学生が44%もいる！」といった「衝撃的」な報告であった[日本地理学会地理教育専門委員会 2005]。後者では、ベトナムの位置がわからない大学生が26.4%ある（正答率73.6%）とされたが、「平均的学力」を有するとされる愛知大学国際コミュニケーション学部における筆者の18年間の教育経験からすれば⁵、この調査にみられる正答率は著しく高いと考える。筆者の2007年および2010年の愛知大学での調査によれば、ベトナムの正答率は、それぞれ50.8%、23.9%に留まっていた[加納 2007]⁶。このように、同じ「大学生」とはいえ、大学進学率が向上して大学生の学力レベル格差が非常に大きくなっている現在、各大学の学力レベルによって地理・歴史認識度は大きく異なることが推測される。したがって、調査対象によって筆者がこれまで指摘してきたように[加納 2007、2009]⁷、このような大学生の認識度調査においては、被調査者の学力レベルについて明示する必要がある、それによってはじめて、ある程度正確な大学生の認識度を把握することが可能になるのである。

本稿では、筆者が専門とする東南アジア地域にかかわる地理・歴史の基礎知識について、「平均的学力」をもつとされる中学力層の愛知大学学生と、旧帝国大学の一つで中部地方における最高峰の学力をもつとされる高学力層の名古屋大学学生⁸とに調査を実施し、学力の差を考慮したうえで、大学生の有する東南アジアの地理・歴史認識の実態

1) 文部科学省ウェブサイト「次期学習指導要領改訂に関する今後のスケジュール（予定）」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/061/siryo/attach/1364457.htm（2015年12月21日閲覧）

2) 文部科学省ウェブサイト「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf（2015年12月21日閲覧）

3) 東南アジア学会の取組については、東南アジア学会ウェブサイト（<http://www.jsseas.org>）を参照されたい。

4) 高校生の東南アジア地域に関する「基礎学力」については、中村が1991年にテスト結果を公表している[中村 2005：46-48]。高校生の認識度を把握する上では興味深いのが、当該調査に応じた高校生の学力レベルが不明であるため、このデータをどこまで一般化できるかは疑問がある。後述の愛知大学学生や名古屋大学学生を対象とした調査結果と比較すると、相当に学力レベルの高い高等学校の生徒であることが推測できる。

11、左の地図中の記号に対応する国の名と、その地域を植民地としていた国の名（植民地とされていない場合は、「なし」と記入して下さい）を答えて下さい。

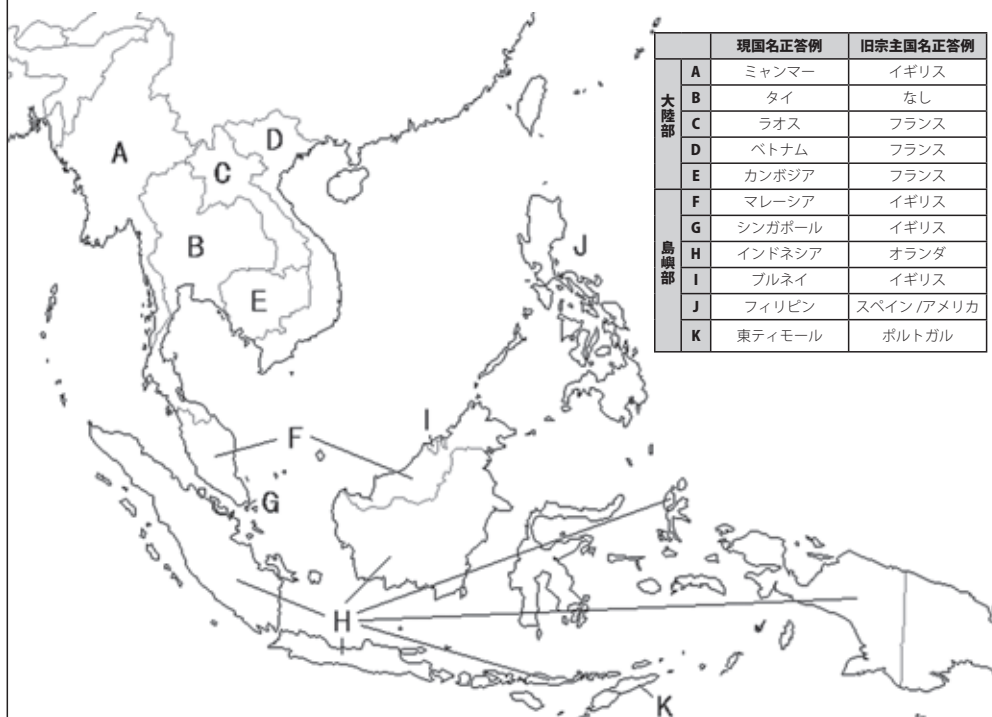


図1 アンケートAにおける地理基礎知識認識度に関わる設問部分と正答例

- 5) 愛知大学国際コミュニケーション学部入学試験の難易度については、アエラムック教育編集部内「大学」編集室（2015）による『2016 年版大学ランキング』に掲載された「2015 入試難易度ランキング」によれば、同学部合格率 50%となる偏差値帯の下限値は 52.5 とされている。概ね「平均的学力」を有する中学力層の大学生が集まっていると考えてよいであろう。
- 6) 日本地理学会のアンケートでは、用紙に列挙された国名に対応する白地図中の番号を解答欄に記入すればよいのに対して、2007 年と 2010 年に実施した愛知大学アンケートでは地図中の記号に対応する国名を自分で記述しなければならない。この点においては本アンケートの難易度の方が高いといえる。なお、2010 年アンケートでは東南アジア地域のみを抽出したため、地域内他国との混同が多くみられ、その点でも難易度が高くなっていると思われる。
- 7) 加納 [2007] では、「平均的学力」を有する大学生の世界地理認識を知るため、2007 年 5 月に愛知大学国際コミュニケーション学部生 132 名を対象として、中学校で学習する世界地図上の 30 か国の国名を回答させ、平均的に 22 か国程度の正答を得た（正答率 73%）。また、加納 [2009] では、同様に大学生の日本史基礎知識定着度を知るため、2008 年 7 月、愛知大学国際コミュニケーション学部生 72 名を対象に、小学校学習指導要領上の 42 名の日本史人物名を回答させ、平均的には 18 名程度の正答を得た（正答率 43%）。
- 8) 調査の対象とした名古屋大学の文系学部の入学試験の難易度については、アエラムック教育編集部内「大学」編集室（2015）による『2016 年版大学ランキング』に掲載された「2015 入試難易度ランキング」によれば、同学部合格率 50%となる偏差値帯の下限値は概ねほとんどの学部で 62.5 であり（教育学部のみ 60）、同系統学部同士の比較では全国国公立大の 2～5 番手程度に位置し、全国においてトップクラスの学力を有する大学生が集まっていると考えてよいであろう。

を量的に把握することで、今後の東南アジア関係教育について高大連携の視点から展望する際の参考とするものである。

1. 調査概要

本稿において使用するデータは、愛知大学国際コミュニケーション学部生⁹・名古屋大学文文学部生に対する2015年実施のアンケートによるものである。

アンケートの内容については、東南アジア地域に所在する11か国の名と旧宗主国の名を回答するアンケートA(図1参照)と、東南アジア史に関する基礎用語25語を回答するアンケートB(表1参照)から構成され、回答者はアンケートAに回答して回答票Aを回収されたのちにアンケートBに回答する。本調査では、アンケートA・Bを対応させるため、両回答票に学籍番号を記入してもらった。アンケートBについて回答を求めた用語については、小豆畑和之編(2008)『よくでる世界史B一問一答 重要用語問題集 改訂版』により、「とくに基本的、もしくは入試においては「必出」の用語」とされている東南アジアに関係する用語のうち、高等学校において最も採択率の高い山川出版社の『詳説世界史B 改訂版』(佐藤次高ほか2008)¹⁰において太字で示されているもの、もしくは専用図版があるものや見出し名とされているもの35件を選定し、さらに全国歴史教育研究協議会編(2008)『世界史B用語集 改訂版』において教科書出現頻度が11件中10件を超えるもの25件を挙げた¹¹(表1参照)。

表1 アンケートBの設問と正答例

設問		正答例
1	1世紀にメコン川下流に成立した、インド文化の影響が強く見られる国はどこか。	扶南
2	2世紀に後漢から独立し海上貿易で栄えた、ベトナム中・南部にチャム人が建てた国はどこか。	チャンパー(林邑)
3	12世紀にヒンドゥー教寺院として建造され、のち仏教寺院となった、アンコール朝の代表的遺跡は何か。	アンコール・ワット
4	7世紀にスマトラのバレンバンを中心に成立した、マレー人の港市国家連合王国は何か。	シュリーヴィジャヤ
5	グプタ様式の影響が見られる、シャイレンドラ朝の代表的仏教遺跡は何か。	ボロブドゥール
6	18世紀頃まで、海上交易で活発に取引され、とくにヨーロッパで珍重された、東南アジア・南アジアの特産品は何か。	香辛料(香料、香薬)
7	陳朝の武将が明軍を撃退して、1428年に建てたベトナムの王朝を何というか。	黎朝

8	15世紀にイスラーム化し、海上交易の中心として繁栄したマレー半島の国はどこか。	マラッカ王国
9	ジャワ島の都市で現在ジャカルタと呼ばれる、当時のオランダ総督府所在地はどこか。	バタヴィア
10	オランダが1830年ジャワ島で実施した、サトウキビ・コーヒー・藍などの栽培を強制する経済政策は何か。	強制栽培制度
11	1819年、イギリスのラッフルズが買収したマレー半島南端の島を何というか。	シンガポール
12	1826年、11の島やペナン、マラッカ(ムラカ)をあわせて形成されたイギリスの植民地を何と呼ぶか。	海峡植民地
13	1887年に成立した、ハノイに総督府を置くフランスの植民地を何というか。	(フランス領)インドシナ連邦
14	19世紀後半に即位し、軍事・行政・司法などの分野で、タイの近代化政策を推進した国王は誰か。	チュラロンコン(ラーマ5世)
15	1896年のフィリピン革命後、独立を認めないアメリカに対して闘争を展開した共和国指導者は誰か。	アギナルド
16	インドネシア国民党を創設し、独立運動を進めた指導者で、1945年8月インドネシア共和国の独立を宣言した初代大統領は誰か。	スカルノ
17	1925年ベトナム青年革命同志会を結成し、のちにベトナム独立同盟(ベトミン)の中心となった、反仏・反日運動の指導者は誰か。	ホー・チ・ミン
18	ベトナム民主共和国の独立を認めない、旧宗主国フランスとの間で勃発した戦争を何というか。	インドシナ戦争
19	ジュネーヴ休戦協定で、暫定的軍事境界線とされたのはどこか。	北緯17度線
20	1965年、アメリカの北ベトナム爆撃(北爆)から始まった戦争を何というか。	ベトナム戦争
21	1976年、南北ベトナムが統一されて成立した国を何というか。	ベトナム社会主義共和国
22	1967年、インドネシア・マレーシア・フィリピン・シンガポール・タイで結成された地域協力機構は何か。	東南アジア諸国連合(ASEAN)
23	九・三〇事件で実権を握り、1968年大統領となり、経済危機のなかで1998年に退陣したインドネシアの指導者は誰か。	スハルト
24	1976年に成立した、親中国的な民主カンブチアの共産主義政権を何というか。	波尔・ポト政権
25	韓国・台湾・香港・シンガポール・ブラジルのように、1970年代に急速な工業化に成功した、これらの国や地域を何と呼ぶか。	新興工業経済地域(NIES)

愛知大学国際コミュニケーション学部生に対する2015年調査は、1学年を対象とした専門科目である「現代アジア事情」において東南アジア地域概説に触れる直前の2015年9月29日に実施した。履修者75名のうち、回答者は68名であり、そのうち日本国内の高等学校出身者64名を分析対象とした。内訳としては、学年別では1学年37名、2学年18名、3学年8名、4学年1名であり、性別では男性15名、女性49名、学科別では英語学科生18名、比較文化学科生45名であった。64名中、高等学校において世界史を履修したと回答した者は48名(75.0%)であり、必修科目とされている世界史を履修したと回答していない者が25%存在することが注目されるが、これまでの調査でも概ね履修率は8割程度であり、その点では大きな差異は見られない。大学入試センター試験において世界史を受験した者は30名(センター試験受験者53名のうちの56.6%)であった。全国における大学入試センター試験受験者全体の世界史受験率は、2015年度入試において22.8%であり¹²、日本史受験率は同42.0%、地理受験率は同39.6%であって¹³、理系受験者が多く選択する地理を除いて考慮しても、被調査者の世界史受験率は高いが、これは「国際コミュニケーション学部」生の国際感覚の発露と考えておきたい。

また、名古屋大学文系学部生に対する調査は、名古屋大学大学院文学研究科林謙一郎准教授にご協力いただき、2015年10月6日に同氏の文系学部1学年対象の講義である「歴史学」において実施いただいた。履修者120名のうち、回答者は118名であったが、このうち理系学部所属1名を除いた文系学部所属1学年117名を分析対象とした。内訳としては、性別では男性69名、女性48名、学部別では文学部生28名、教育学部生15名、法学部生34名、経済学部生34名、情報文化学部生6名であった。117名中、高等学校において世界史を履修したと回答した者は88名(75.2%)、大学入試センター試験において世界史を受験した者は81名(69.2%)であった¹⁴。高等学校において世界史を履修

9) なお、愛知大学国際コミュニケーション学部生に対しては、2010年にも同内容のアンケートを実施している。同調査は、2015年調査と同様の質問紙を用い、1学年を対象とした専門科目である「現代アジア事情」および2学年以上を対象とした専門科目である「現代アジアの生活文化」において2010年10月から11月にかけて実施したものである。回答者73名のうち日本国内高等学校出身者67名を分析対象とした。結果については、[加納2010]において公表した。

10) 本アンケートは2010年に作成したものをそのまま使用しているため、用語選定に使用した資料が2008年のものとなっている。

11) ただし、アンケートAで回答した現国名を答えさせるものや、他の項目に関連する項目を排除した。

12) 「世界史」受験率 = (「世界史A」・「世界史B」受験者数の和) / 地理歴史受験者数 x 100として算出した。したがって、地理歴史延受験者数で除した数値とは異なる。なお、各数値については、大学入試センターウェブサイトに掲載されている「平成27年度大学入試センター試験実施結果の概要」(<http://www.dnc.ac.jp/albums/2015年12月閲覧>)によった。

13) 地理歴史科目は2科目を受験できるため、各科目受験者合計は地理歴史受験者数を超過する。

14) 名古屋大学学生については、大学入試センター試験不受験者は回答者に含まれていなかった。

したと認識している学生の割合は愛知大学学生とほぼ同じであり、高学力層と中学力層との間における世界史不履修率の差はあまり見られないことがわかる。大学入試センター試験における世界史受験率は非常に高いが、これは文系学部1学年を対象とする「歴史学」に、東洋史専攻の教員が担当する科目と、日本史専攻の教員が担当する科目とが並列されており、今回の調査は前者の受講生に対するものであることが影響していると考えられる。

2. 東南アジア基礎知識の定着傾向

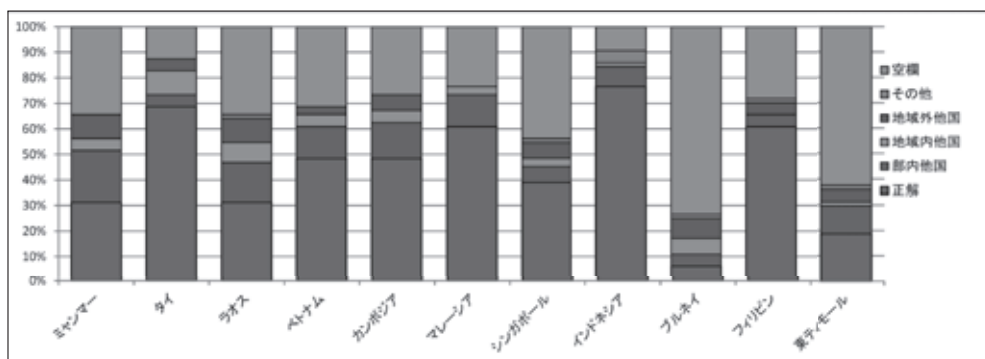
東南アジアの現国名（11点満点）、旧宗主国名（11点満点）、歴史基礎知識（25点満点）の各正答率については、図2に示したとおりである。総合得点の分布については、図3のとおりである。現国名の「正解」以外の誤答カテゴリーのうち、「部内他国」としてあらわしたものは、本来の正答となる国名が属する東南アジア大陸部・島嶼部それぞれの各部内に存在する他国名を回答したものであり¹⁵、「地域内他国」は東南アジア地域内ではあるが本来の正答となる国名が属する大陸部・島嶼部をまたぐ他国名を回答したものの、「地域外他国」は東南アジア地域外の他国名を回答したものの、「その他」は国名以外の回答が記載されていたもの、「空欄」は回答が記載されていなかったものを意味する。

東南アジアの現国名については、大陸部においてはタイが、島嶼部においてはマレーシア、インドネシア、フィリピンが、常に正答率が高い。とくにインドネシアは、いずれの調査においても正答率が最も高く、東南アジア地域における大学生の認識度が最も高いことがわかる。

一般に島嶼部において正答率が高いのは、地理的に特徴的であることや冷戦構造化において日本と同じ西側に属し、経済的に発展している国が多いことが影響していると思われる。東ティモール、ブルネイについては認識度が低いが、これは国土の狭少や人口の寡少によると思われる。シンガポールについては、名古屋大学学生においては認識度が高いが、愛知大学学生においてはマレーシアに比べてはるかに低い。

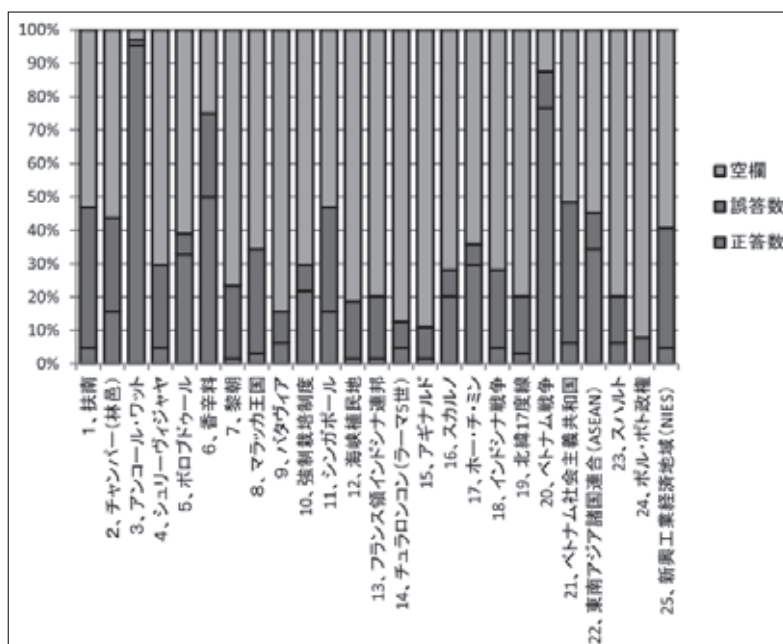
大陸部については、タイについての認識度が高く、これは日本との政治・経済分野における密接な関係によるものと思われる。愛知大学においても名古屋大学においても、タイ地域研究を専門とする教員が配置されていることも、若干の影響を与えているかもしれない。とくに愛知大学においてはタイ語を第2外国語として選択することも可能であるため、他大学に比べて認識度が高くなる傾向があるといえよう。名古屋大学におい

15) 東南アジア地域研究においては、この地域を「大陸部」および「島嶼部」に分けて認識することが一般的であり、現国名でいえば、ミャンマー・タイ・ラオス・ベトナム・カンボジアの5か国が「大陸部」に、マレーシア・シンガポール・インドネシア・ブルネイ・フィリピン・東ティモールの6か国が「島嶼部」に属する。



	ミャンマー	タイ	ラオス	ベトナム	カンボジア	マレーシア	シンガポール	インドネシア	ブルネイ	フィリピン	東ティモール
現国名正答数	20	44	20	31	31	39	25	49	4	39	12
現国名正答率	31.3	68.8	31.3	48.4	48.4	60.9	39.1	76.6	6.3	60.9	18.8
旧宗主国名正答数	11	18	7	17	9	16	18	14	1	21	2
旧宗主国名正答率	17.2	28.1	10.9	26.6	14.1	25.0	28.1	21.9	1.6	32.8	3.1

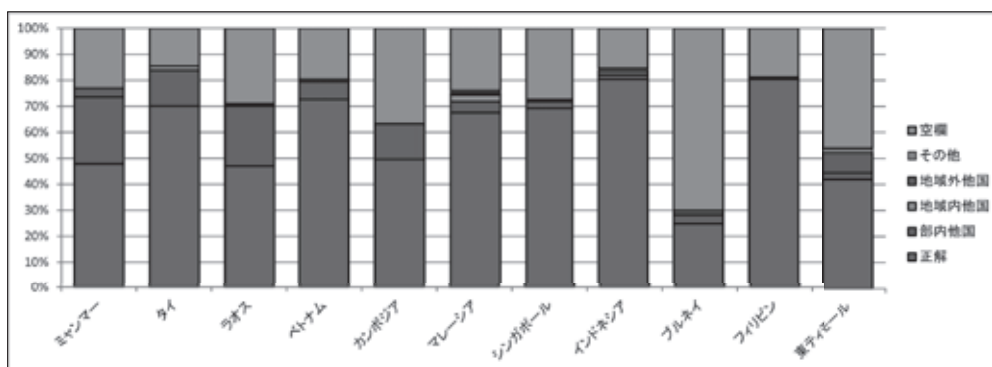
	正答数	正答率
1、扶南	3	4.7
2、チャンパー(林邑)	10	15.6
3、アンコール・ワット	61	95.3
4、シュリーヴィジャヤ	3	4.7
5、ポロブドゥール	21	32.8
6、香辛料	32	50.0
7、黎明	1	1.6
8、マラッカ王国	2	3.1
9、パタヴィア	4	6.3
10、強制栽培制度	14	21.9
11、シンガポール	10	15.6
12、海峡植民地	1	1.6
13、フランス領インドシナ連邦	1	1.6
14、チュロンコン(ラーマ5世)	3	4.7
15、アギナルド	1	1.6
16、スカルノ	13	20.3
17、ホー・チ・ミン	19	29.7
18、インドシナ戦争	3	4.7
19、北緯 17度線	2	3.1
20、ベトナム戦争	49	76.6
21、ベトナム社会主義共和国	4	6.3
22、東南アジア諸国連合 (ASEAN)	22	34.4
23、スハルト	4	6.3
24、ボル・ボト政権	5	7.8
25、新興工業経済地域 (NIES)	3	4.7



愛知大学生の正答率と誤答内容

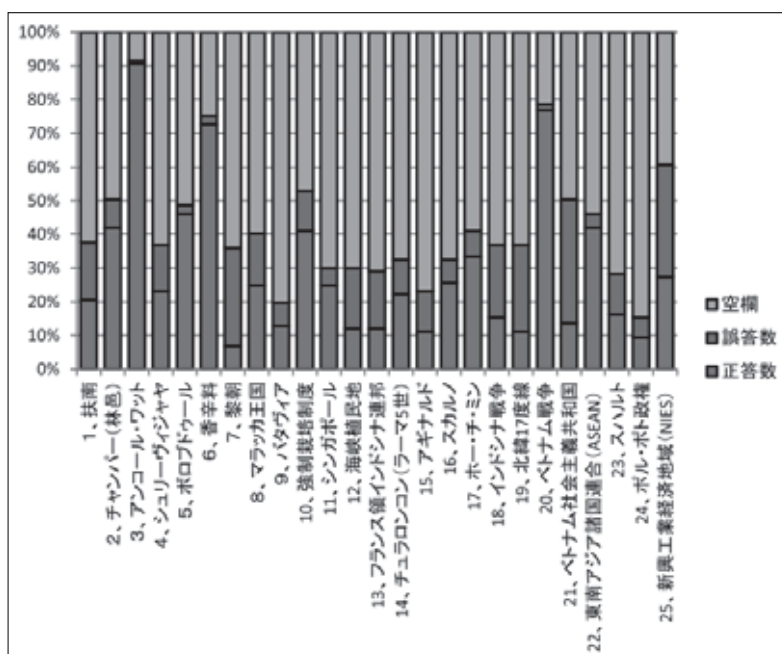
図2 各大学別の

大学生の東南アジア基礎知識定着度：愛知大学国際コミュニケーション学部生および名古屋大学文系学部生に対する調査から



	ミャンマー	タイ	ラオス	ベトナム	カンボジア	マレーシア	シンガポール	インドネシア	ブルネイ	フィリピン	東ティモール
現国名正答数	56	82	55	85	58	79	81	94	29	94	49
現国名正答率	47.9	70.1	47.0	72.6	49.6	67.5	69.2	80.3	24.8	80.3	41.9
旧宗主国名正答数	38	55	34	59	36	43	50	33	11	57	3
旧宗主国名正答率	32.5	47.0	29.1	50.4	30.8	36.8	42.7	28.2	9.4	48.7	2.6

	正答数	正答率
1、扶南	24	20.5
2、チャンパー(林邑)	49	41.9
3、アンコール・ワット	106	90.6
4、シュリーヴィジャヤ	27	23.1
5、ポロブドゥール	54	46.2
6、香辛料	85	72.6
7、黎朝	8	6.8
8、マラッカ王国	29	24.8
9、バタヴィア	15	12.8
10、強制栽培制度	48	41.0
11、シンガポール	29	24.8
12、海峡植民地	14	12.0
13、フランス領インドシナ連邦	14	12.0
14、チュロンコン(ラーマ5世)	26	22.2
15、アギナルド	13	11.1
16、スカルノ	30	25.6
17、ホー・チ・ミン	39	33.3
18、インドシナ戦争	18	15.4
19、北緯17度線	13	11.1
20、ベトナム戦争	90	76.9
21、ベトナム社会主義共和国	16	13.7
22、東南アジア諸国連合(ASEAN)	49	41.9
23、スハルト	19	16.2
24、ボル・ボト政権	11	9.4
25、新興工業経済地域(NIES)	32	27.4



名古屋大学生の正答率と誤答内容

正答率と誤答内容

てはベトナムにつ
いての認識度も高
く、インドシナ3
国における存在感
や、「世界史」教科
書における扱いの
高さが影響してい
るものと思われる。
その一方で、
近年経済界におい

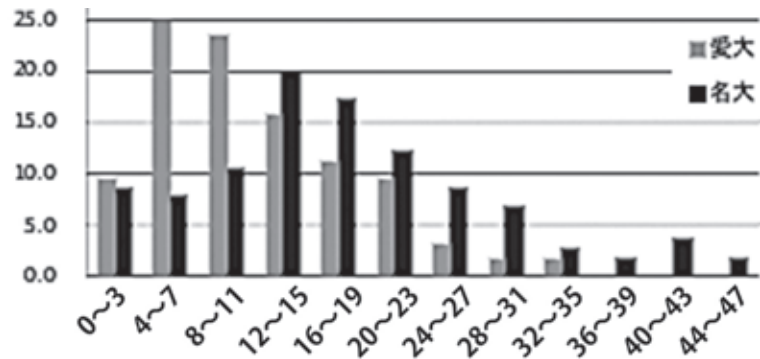


図3 総合得点分布

て注目されているミャンマーやラオス、カンボジアについては認識度が低い。

現国名の誤答のなかでは、「空欄」を除けば「部内他国」の比率が高く、大陸部と島嶼部がかなり明確に認識されていることがうかがわれる。大陸部内においてはラオスとカンボジアを逆に回答するものが目立ち、ミャンマーを「タイ」と誤答する者も多かった。島嶼部においては、東ティモールを「パプアニューギニア」と回答するものが目立った。

旧宗主国については、全体としてかなり認識度が低いものの、タイ、ベトナム、マレーシア、シンガポール、フィリピンの正答率が比較的に高い。ベトナムの旧宗主国名の正答率が比較的に高い一方で、同じ「フランス領インドシナ連邦」に属したラオスやカンボジアの旧宗主国名は正答率が低い点は気になるところである。「フランス領インドシナ連邦」＝現在のベトナムの領域、という認識があるのかもしれない。また、高等学校の世界史において近現代史の理解の重要性が指摘されているなかで、ミャンマーやイン

表2 諸条件における各得点の平均と標準偏差

		愛知大学						t検定
		n	現国名得点	旧宗主国得点	地理得点	歴史得点	TOTAL	
愛大全体		64	4.9(2.9)	2.1(2.5)	7.0(5.1)	4.5(2.6)	11.5(7.0)	
性別	男	15	6.4(2.8)	3.4(3.1)	9.8(5.5)	5.9(3.0)	15.7(8.0)	t=2.75
	女	49	4.4(2.8)	1.7(2.2)	6.1(4.6)	4.1(2.3)	10.3(6.1)	***
センター試験科目別	世界史	30	5.4(3.0)	2.7(2.4)	8.2(5.1)	5.7(2.3)	13.8(6.5)	t=2.29
	世界史以外	23	4.4(2.8)	1.5(2.5)	6.0(4.8)	3.6(2.4)	9.5(6.9)	**
高校での世界史履修の有無	世界史履修	48	5.2(3.0)	2.4(2.6)	7.6(5.3)	4.8(2.7)	12.4(7.4)	t=1.60
	世界史不履修	16	4.1(2.4)	1.1(2.0)	5.3(3.8)	3.9(1.7)	9.1(5.2)	
世界史履修者中の世界史センター試験受験の有無	世界史受験	30	5.4(3.0)	2.7(2.4)	8.2(5.1)	5.7(2.3)	13.8(6.5)	t=1.82
	世界史不受験	18	4.7(3.1)	1.9(2.8)	6.6(5.5)	3.3(2.8)	9.9(8.0)	*
学部・学科別	英語学科	18	3.4(2.5)	1.0(2.1)	4.4(4.1)	3.6(1.8)	8.1(5.5)	t=2.73
	比較文化学科	45	5.6(2.8)	2.6(2.5)	8.2(5.0)	5.0(2.7)	13.2(7.0)	***
学年別	1学年	37	5.0(2.9)	2.2(2.3)	7.2(5.0)	4.9(2.5)	12.2(6.7)	
	2学年	18	4.2(2.6)	1.6(2.7)	5.7(4.8)	3.8(2.4)	9.6(6.9)	
	3学年	8	6.4(3.0)	3.0(2.9)	9.4(5.2)	4.6(2.9)	14.0(7.6)	
	4学年	1	-	-	-	-	-	

○内は標準偏差、*:0.05<p<.10、**:p<.05、***:p<.01

ドネシアの旧宗主国名についての正答率が低い点は注目すべきであろう。

歴史用語については、近年人気を集めている「世界遺産」として名高い遺跡や、アメリカ映画において舞台とされることが多い「ベトナム戦争」、近年のニュースにおいても頻出の「ASEAN」といった基本的な用語を扱っているにもかかわらず、正答率は全体として惨憺たるものであった。「アンコール・ワット」の認識度が常に高く、同じく世界遺産であって試験においてセットで出題されがちな「ボロボドゥール」を大きく引き離す結果になっている点が注目される。ただし、「アンコール・ワット」については、設問中に「アンコール朝」という語が含まれていたことがヒントになって正答率が高くなった可能性はある。そのほか、「香辛料」、「ベトナム戦争」の正答率が高い。一方、東南アジア史の流れのなかで重要な意味を有する「マラッカ」や「シンガポール」については、高い認識度は見られなかった。人名についても、正答率は全般的に低かった。そのなかでは、「スカルノ」と「ホーチミン」の認識度が比較的に高いことがわかった。なお、最も白紙回答率が最も高かったのは「ボル・ボト政権」であり（愛知大学学生では90%以上、名古屋大学学生でも80%以上が白紙回答であった）、これについては誤答すら想起されないということも明らかになった。

3. 回答者特性別に見た東南アジア基礎知識の定着傾向

次に、回答者の属性による認識度を比較することで、大学生の東南アジア基礎知識認識度に関するより詳細な把握を行いたい。表2は、愛知大学学生と名古屋大学学生との諸属性における各得点の平均と標準偏差を示したものである。

まず、愛知大学学生についてみていきたい。

大学入試センター試験における世界史受験者と世界史不受験者（センター試験不受験

		名古屋大学					t検定
	n	現国名得点	旧宗主国得点	地理得点	歴史得点	TOTAL	
名大全体	117	6.5(3.3)	3.6(3.4)	10.1(6.3)	7.3(5.1)	17.4(10.2)	
男	69	6.7(3.5)	4.0(3.7)	10.8(6.8)	7.8(6.0)	18.6(11.6)	t=1.47
女	48	6.2(3.1)	2.9(2.7)	9.1(5.4)	6.6(3.4)	15.8(7.5)	
世界史	81	7.3(3.0)	4.5(3.4)	11.8(6.0)	9.2(5.0)	21.0(9.4)	t=6.64
世界史以外	36	4.7(3.5)	1.6(2.3)	6.3(5.2)	3.1(1.8)	9.4(6.5)	***
世界史履修	88	7.1(3.2)	4.2(3.5)	11.3(6.3)	8.7(5.1)	20.0(9.9)	t=5.18
世界史不履修	29	4.9(3.4)	1.7(2.2)	6.6(5.0)	3.2(1.7)	9.7(6.2)	***
世界史受験	80	7.3(3.0)	4.4(3.5)	11.7(6.0)	9.3(5.0)	21.0(9.5)	t=3.10
世界史不受験	8	5.0(4.2)	2.0(3.1)	7.0(6.9)	3.0(2.2)	10.0(8.8)	***
文学部	28	7.5(3.3)	5.2(3.5)	12.7(6.6)	10.3(6.2)	22.9(11.7)	
教育学部	15	5.9(3.4)	3.3(3.4)	9.2(6.4)	6.6(5.3)	15.8(10.9)	
法学部	34	7.0(2.9)	4.1(3.1)	11.1(5.5)	7.0(4.5)	18.1(8.1)	
経済学部	34	5.9(3.2)	2.5(3.2)	8.4(5.8)	6.3(3.7)	14.7(8.3)	
情文学部	6	6.5(4.8)	5.0(3.8)	11.5(8.5)	9.7(6.8)	21.2(14.0)	

者を除く)との比較では、t検定の結果、両条件の平均得点の差は有意であった(両側検定: $t(51)=2.29, p<.05$)。したがって、センター試験において世界史を受験した者はそうでない者に比較して、東南アジアの地理・歴史に関する認識度が高いといえる。歴史用語のみではなく、現国名・旧宗主国名についても世界史受験者の得点の方が高い傾向がある。一方、高等学校での世界史履修の有無については、概ね2割の学生が「不履修」として回答しているが、有意な差は検出されなかった(両側検定: $t(62)=1.60, p>.10$)。実際、世界史履修者のうちでセンター試験において世界史を受験していない者(センター試験不受験者を含む)については、世界史不履修者とはほぼ同じ得点であった。ここから、世界史を高等学校において履修しただけでは知識の定着はほとんど期待できず、大学入試において当該科目を受験して初めて、知識が定着することがわかる¹⁶。

性別による比較では、両条件の平均の差は有意であった(両側検定: $t(62)=2.75, p<.01$)。したがって、男性の方が女性よりも東南アジアの地理・歴史に関する認識度が高いといえる。現国名・旧宗主国名・歴史用語全てにおいて、男性の平均得点の方が女性のそれより高かった。センター試験において世界史を受験したかどうかの平均得点に有意な差をもたらすことがわかっているため、男性の方が女性よりも世界史受験率が高いことが疑われたが、実際の世界史受験率は両性とも大きな差はなかった(愛知大学男性回答者中のセンター試験世界史受験率46.7%、女性46.9%)。また、学科別の平均得点についても有意な差が見られ(両側検定: $t(61)=2.73, p<.01$)、比較文化学科生が英語学科生より有意に得点が高かったが、これもセンター試験での世界史受験率には大きな差はなかった(比較文化学科生回答者中のセンター試験世界史受験率48.9%、英語学科生44.4%)。女性学生や英語学科生の欧米志向が強いため、東南アジア基礎知識認識度が低迷したと思われる。

次いで、名古屋大学学生について見ていきたい。

大学入試センター試験における世界史受験の有無については、t検定の結果、愛知大学学生と同様に、平均得点に有意な差が見られた(両側検定: $t(115)=6.64, p<.01$)。一方、世界史不履修者は25%程度であったが、世界史履修者と不履修者には有意差があるものの、これは高校での世界史履修者の多くがセンター試験において世界史を受験しているためであり、世界史は履修したが大学入試センター試験で世界史を受験しなかった者と世界史不履修者との間には得点差はほとんど見られなかった。ここから、高学力層においても中学力層と同様に、世界史を高等学校において履修しただけでは知識の定着は期待できないことがわかる。

愛知大学学生では有意な差が見られた性別による得点差については、名古屋大学学生

16) この点、筆者が以前に発表した日本史基礎知識の定着と同じ傾向を有しているといえる[加納 2007、2009]。

については有意な差が見られなかった（両側検定： $t(115)=1.47$, $p>.10$ ）。これは、愛知大学学生においては性別が地理・歴史認識度に影響を有するのに対して、名古屋大学学生においては性別が地理・歴史認識度に影響を有しないことを意味しており、ジェンダーと学力との相関性の観点から興味深い。学部別では、文学部生が最も平均点が高かったが、これは文学部の入学試験「世界史」において東南アジア史が頻出することによるらしい。

愛知大学学生と名古屋大学学生との間では、分散の大きさが等質とみなせなかったため、ウェルチの法による t 検定を実施した。その結果、両者の平均の差は有意であり（両側検定： $t(169)=4.50$, $p<.01$ ）、名古屋大学学生の平均得点が愛知大学学生の平均得点より高かった。この結果は、両者の学力差から考えれば当然のように考えられるかもしれないが、その内容を分析してみると、センター試験において世界史を受験しなかった学生の得点については、ほとんど差がなく、有意差も見られなかったことから（両側検定： $t(57)=0.08$, $p>.10$ ）、この差は大学入試センター試験において世界史を受験した学生の得点差が有意であったことと関連すると考えられる。すなわち、名古屋大学学生と愛知大学学生との基礎知識認識度の差異は、受験科目においては非常に大きく懸隔するものの、

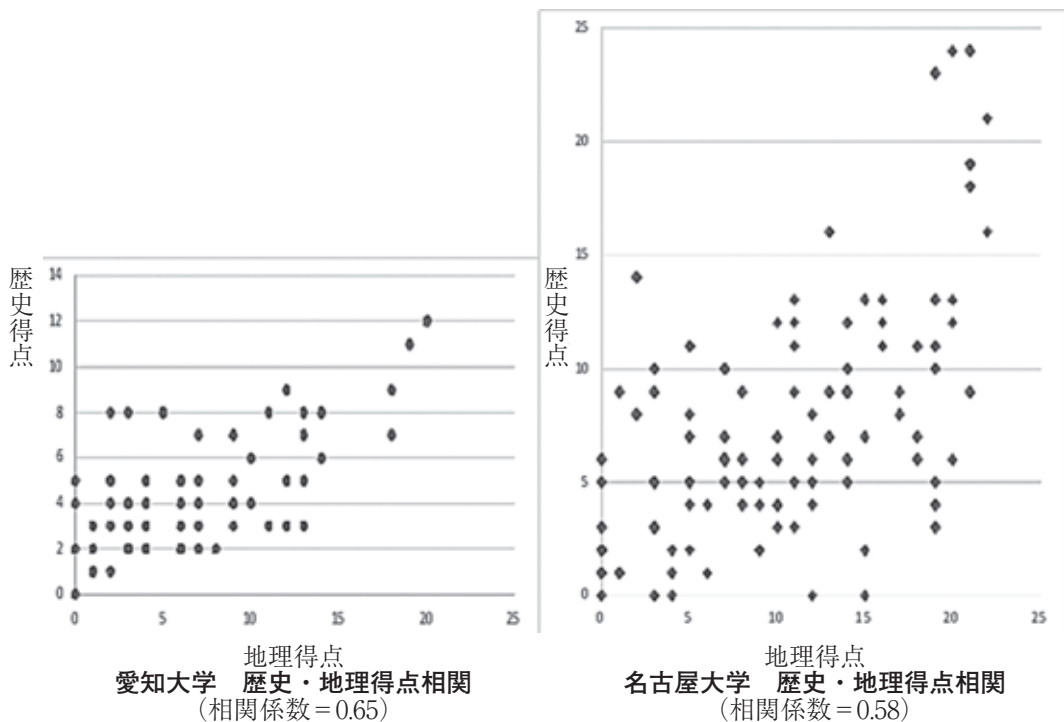


図4 歴史・地理各得点の相関

それ以外の部分についてはそれほど大きく差はないことがわかった。

なお、図4は、両大学学生の歴史・地理得点の相関を示したものであり、相関係数はともに0.6前後で歴史得点と地理得点の間にはほぼ同程度のやや強い相関があることがわかるが、愛知大学学生の場合は歴史得点が10点を超える回答者は地理得点でも満点に近い点数を獲得しているのに対して、名古屋大学学生の場合は歴史得点が10点を超える者であっても地理得点は5点以下である場合が見られる。愛知大学学生の場合、地理認識ができていない場合は歴史用語もほとんどできておらず、地理認識・歴史認識の両者にバランスが見られるのに対して、名古屋大学学生の場合は歴史用語を知っているにもかかわらず地理認識ができていないという者が見られ、その点でアンバランスが観察できたといえる。このような認識の偏りは、大学受験においては目標をクリアできるとしても実生活においては役に立ちにくく、世界史を学ぶ以前に地理認識を確固にする必要があると考える。

結び

以上、中学力層の大学生として愛知大学国際コミュニケーション学部生の、また高学力層の大学生として名古屋大学文系学部生の、東南アジアに関する地理・歴史の基礎知識認識度を、アンケート調査を通して示してきた。

中学力層としての愛知大学学生の平均的な認識度としては、東南アジア11か国中、現国名を5か国程度、旧宗主国名を2か国程度正答でき、高等学校における世界史教育において重要とされる東南アジア史用語25語のうち5語程度を認識していることがわかった。

一方、高学力層としての名古屋大学学生の平均的な認識度としては、東南アジア11か国中、現国名を7か国程度、旧宗主国名を4か国程度正答でき、高等学校における世界史教育において重要とされる東南アジア史用語25語のうち7語程度を認識していることがわかった。

地理的には、とくに島嶼部の諸国の認識度が比較的に高く、大陸部ではタイの認識度が高かった。旧宗主国名については、全体として認識度がかなり低いが、タイ、ベトナム、マレーシア、シンガポール、フィリピンの旧宗主国名について比較的に認識度が高かった。歴史用語については、「アンコール・ワット」、「香辛料」、「ベトナム戦争」の認識度が高かったが、全般に正答率は低く、とくに人物名については、中学力層・高学力層ともに認識度が低かった。この点、要暗記項目が日本史や地理に比較してはるかに大量である現在の高等学校世界史教育を見直し、高学力層にも記憶されないような用語の量的削減を図り、思い切った選択と集中を行って、必要最小限の基礎知識を得られるような高校生の学力別・進路別基準を作成するべきであると考え。

また、昨今、日本において旅行目的地として人気を集めている「世界遺産」に登録されていても、「アンコール・ワット」以外の正答率はそれほど高くないこともわかった。これらの点からは、東南アジア史に登場する用語が、大学生には具体的な人物名や旅行先として明確に認識されていないことがわかる。高等学校における世界史教育においては、エピソードを用いた人物像の魅力的具体化や、地図や観光ガイドブックを活用した身体感覚を伴う授業展開を実施していくことが有益であると考えられる。

回答者の特性別に東南アジア基礎知識の定着度を見ていくと、中学力層においても高学力層においても、とくに大学入試での世界史受験の有無が有意な得点差を生じさせることがわかった。その一方、高校での世界史履修の有無は、東南アジア基礎知識の定着にほとんど結びついていないこともわかった。

換言すれば、世界史が大学入試の受験科目となるかどうかという点が、東南アジアの地理・歴史に関する基礎知識の認識度を大いに左右するといえ、高等学校教育において世界史を必修科目にするかどうかというよりは、大学入試における世界史受験者を増加させる方が日本人の東南アジア基礎知識の認識度を高めることになるといえよう。この点では、世界史受験を魅力化するために、上述のような用語数の徹底的削減と集中が重要であろう。

しかしながら、それ以前の問題として、中学力層においても高学力層においても、東南アジア認識の基盤となるべき地理的認識が十分ではない点は、大いに危惧されるところである。経済界において「タイ+1」などの動きが加速する今日、現在の大学生たちの多くはいずれ日本のビジネスを背負って、より深く東南アジア諸地域と連携せざるをえなくなるはずである。その点では、大学入試において世界史を受験する人々を増加させるとともに、その基礎として義務教育段階での地理的基礎知識の定着を確実に図ることが必要不可欠であるといえよう。

したがって、要約すれば、①義務教育において東南アジアを含む世界地理の基礎知識定着を徹底する、②高等学校教育において要暗記項目を大量に削減し、選択と集中を徹底することで、世界史受験の魅力を高める、③高等学校教育においては、厳選された項目について、なるべく身体感覚を伴う授業展開を心掛ける、といったことが、将来の日本と東南アジアの関係の緊密化を見通したうえで重要であると考えられる。

参考文献

- ・ アエラムック教育編集部内「大学」編集室（2015）『2016 年版大学ランキング』（朝日新聞出版）
- ・ 朝日新聞社出版本部「大学」編集室（2007）『2008 年版大学ランキング』（朝日新聞社）
- ・ 小豆畑和之編（2008）『よくでる世界史 B 一問一答 重要用語問題集 改訂版』（山川出版社）
- ・ 加納寛（2007）「大学生の地理的世界認識：愛知大学国際コミュニケーション学部生に対する調査から」『文明 21』 19
- ・ 加納寛（2009）「大学生の日本史知識定着度：愛知大学国際コミュニケーション学部生に対する調査から」『文明 21』 22
- ・ 加納寛（2010）「『平均的』大学生の地理・歴史・東南アジア関係基礎知識認識度」（「高大連携による大学における新しい東南アジア教育モデルの構築」第 6 回研究会（東京外国語大学））
- ・ 桃木至朗（2009）『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史』（大阪大学出版会）
- ・ 中村薫（2005）『世界史教育の視点と方法』（創元社）
- ・ 中村薫（2009）「中学校・高等学校の世界史的分野における東南アジア学習の変遷」『芦屋女子短期大学研究紀要』 33
- ・ 日本地理学会地理教育専門委員会（2005）「大学生・高校生の世界認識の調査報告：日本地理学会からの提言」(<http://www.ajg.or.jp/organization/committee2003/chirikyoiuku050222.pdf>, 2015 年 12 月閲覧)
- ・ 佐藤次高ほか（2008）『詳説世界史 B 改訂版』（山川出版社）
- ・ 戸瀬信之・西村和雄（2001）『大学生の学力を診断する』（岩波書店）
- ・ 全国歴史教育研究協議会編（2008）『世界史 B 用語集 改訂版』（山川出版社）